

## 「神のことばを心に刻め」

申命記 6:1-9

(幼児祝福式)

## 【1】申命記について

申命記の「申」とは、「かさねる」という意味である。モーセの死の直前になされたモーセの説教がここには記されているが、イスラエルの民が約束の地に入る直前にモーセは神が与えてくださった契約を再確認するために語った。これは、「みおしえの確認」(1:5)である。私たちは、繰り返し、何度も主の教えを聞き、確認しなければならない。このことによって、私たちは日々矯正され、主のみ旨にかなう者として変えられていくのである。つまり、救われた者としてその救いにふさわしくされていくのである。

主イエスは、律法の中でどれが一番重要な戒めかと問う律法学者に対して、神を愛することを教えた(マタイ 22:37, マルコ 12:29-30)。特に、申命記 6章には、主を愛して生きる者の具体的な生き方が命じられているのである。主を愛して生きることは観念的な生き方ではない。愛の実践を伴う生き方である。これが、人間に与えられた命への道、真の祝福の生涯でもある。

祝福への道は、主のみおしえに従うことにあり、主のみおしえを「聞け」(6:4)と主は促し、教えておられる(6:5)。

## 【2】神の愛への応答として従う

私たちは、自分の子供に対して最も良いものを与えたいと願いながら教育してるのではないだろうか。そのように、神ご自身もご自分の民に対して愛を注ぎ、彼らを幸せにすることを願っておられるのである(6:3)。それは、私

たちが愛を抜きにして、義務を果たしてさえいれば良いということではない。新約聖書の時代、律法学者たちはみことばによって表わされている神の愛を見失っていた。彼らにとっての神のことばは義務を促す冷たいことばになってしまっていたのである。私たちは、主のみおしえに込められた神の温かい愛を感じながら、このみおしえに応答する者でありたい。

## 【3】神のみわざを教えよ

モーセは約束の地を受け継ごうとしている民に対して「これらのことばを心にとどめなさい。(心に刻みなさい)」(6)、「よく教え込みなさい」(7)と命じる。それは、知識や規則、義務を教えるということであるが、そこにある神の愛の御業が抜け落ちてしまうと神を愛することがわからなくなってしまう。

親に従うのはそこに信頼があるからである。同様に、私たちが神に従うのも神が信頼すべきお方であるからである。世界を創造された神に逆らった人間を神は救うために救いの計画を進められた。そこで神はご自身の民を恵みによって選び、そこに御業を現された。それにも関わらず何度も神に逆らう民を導き、行くべき道を教え、幸いへの道を語り続け、ご自身の物語(歴史)の中を歩ませてくださったのである。

神はその民に対してご自身にかけた約束を誓われた。この約束は私たちに対してもなされた約束である。その約束は神のひとり子イエス・キリストによって成就した。救いの約束である。ここに神の愛が示されている。それゆえ、私たちの生涯を支え導いておられる神のみおしえを日々心に刻むのである。みことばの故に、私たちを愛しておられる主を愛し、応答して行きたい。それが継承すべき財産である。